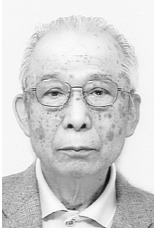
――歌集の著者から――

『琥珀夕映え』竹内みどり

令和3年7月　柊書房刊

第一歌集『琥珀夕映え』を上梓した二〇二一年は私にとって特別な年となりました。今まで自分や自分の生活を振り返る余裕もなかったのですが、歌集出版により自分をいろいろな方向から見る機会となったからです。自分を取り巻く環境と自分自身にじわじわと、そして確実に変化が訪れました。それは目に見えたり触って形を確かめたりできるものではありませんが、とにかく画期的なことで、「歌集を出版して一歩右に寄っただけなのにタイムスリップしてしまい、予定とは少し違う人生を歩んでいる」という感覚です。この解放感を何と言ったら良いのでしょうか。やはりタイムスリップ以外にないと思うのです。歌集で気に入っていることの一つに表紙のデザインがあります。時間を内に包み込んだ琥珀の永遠性が表現され、同時に人を含めた多くのものはかなさを思い起こさせます。そして私をもっと自由に生きようと思わせてくれました。琥珀の時間が今も体内をひたひたと浸してゆくようです。

『小丸川の瀬音』長尾和守



令和3年8月　飯塚書房刊

高齢での歌集出版は大変だと聞いていたので、一年前から準備を始めた。選歌は今回も高野公彦氏にお願いし、快く引き受けて頂き深く感謝している。また、歌集を読んで下さった方々から暖かい評や感想を賜り、さらに、この歌集の批評を担当された金子智佐代氏から丁寧かつ緻密な評を頂くなど、大変有難く嬉しく思う。

ところで、今年四月からＮＨＫの朝ドラで「らんまん」が始まった。朝ドラはあまり見ないが、今回は高知出身の植物学者牧野富太郎が主人公なので毎回見ている。というのも、牧野富太郎の名前を聞いてすぐにこの歌集にその名を詠んだ歌があったのを思い出したからである。八年前四国遍路を巡った際、高知市の五台山に建つ札所の竹林寺のすぐ横に、意外にも牧野植物園があり、ぜひ見たかったが時間の余裕がなく諦めた。しかし翌日、足摺岬の札所の近くで、牧野富太郎の名前とジョン万次郎の立像に会い、二首の歌を得た。歌を介して偉大な二人と微かな縁が生まれたような自己満足に浸っている。

『人間の声』中道　操

令和3年12月　六花書林刊

『人間の声』は、私の第二歌集である。第一歌集は、『はりねずみの唄』（平成十一年、不識書院刊）。

四十代にさしかかってから、随筆を書きはじめた。そして昭和五十五年に最初の随筆集『遠ざかる風景』を出した。その少し前から思う所あって、勤め先の近くで開講されていた田谷鋭氏の短歌教室に通っていた。文学の師と仰いでいた作家の小川国夫氏からは、こう言われた。

「あなたのは知の文章だ。でも女流歌人の歌を読み込んだら、少しは変わってくるかもしれない……」

やがて島田修二氏が小川氏と旧制高校の同窓だったと知る。そんなこんなでコスモスに入会し、三多摩支部に所属して四十年余。その間の営みの一角が歌集の上梓だと言えよう。この度は選歌の狩野一男氏、刊行の宇田川寛之氏のご配慮もあり、広範囲の方々から行き届いた鑑賞批評を頂いた。久我田鶴子氏（砂子屋書房ホームページ「日々のクォリア」（2021/12/03）。年が明けてからの長谷川櫂氏（読売新聞コラム「四季」（2022/03/27））など。

――歌集の著者から――

『砦無きこと』矢野博子

令和3年12月　柊書房刊

この第三歌集の集名は選歌をお願いした狩野一男氏がさまざまに述べられたお言葉に拠りました。私は21歳で難病に罹り現在88歳の老婆です。26歳のときコスモス短歌会の一員にさせてもらい、61年間にいったいこれと言える何首があったのだろうか？　とこの歌集出版のあと自省することしきりです。

病みながら絶体に病むことを詠まない歌びとの作品を知ったとき、恥じ入るおもいの衝撃は深く大きいものでした。宮柊二先生の「歌は生の証明」のためとのお言葉に拠ってきたつもりでしたが、短詩形文学の詩（ポエム）の有無が作品の良否となることを少しは自覚するべきだったと述懐しております。高野公彦氏よりお励ましを頂き、松尾祥子氏より身に余る批評文を頂き、今は亡き古屋祥子氏より忌憚のない温かい御批評を頂いた。

生来の内向性が沢山の方々への御礼状や御挨拶で、初めてにして最後の忙しさでもあった。残る生の限り詠み続けたいと亡き母にも報告した。

『冬蕾』都甲真紗子

令和3年12月　角川書房刊

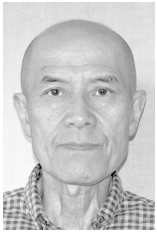
平成三年、小倉祇園太鼓の響きに街中が賑っていた。歌人協会のお招きの高野公彦氏にお会いして、思いがけなく歌集の出版をとお言葉を頂いた。とまどっている私に、出版の準備につき何かとお教え下さった。

十代半ばより独り歌を作り、戦中戦後、敗戦、満洲よりの引揚、戦後内地での生活など激動の若き日の歌の整理がはかどらず高野氏に見て頂く迄二年程かかりようやく第一歌集『白き春』が出版できた。次の歌集のご相談の折、「四季シリーズ」にしてはとのご提案に同感し、『夏耀』『秋韻』と今回『冬蕾』で完成したことは、全く高野氏のお力添えのお蔭です。私は本年紀寿となったが白寿までに四季シリーズを完成できて無上の喜びです。

昭和時代の北海道定山渓での大会の折、ホテルの車を待つ人に「寒い寒い」と腕をさする半袖の青年がいた。ふとフィルムを買い忘れたと呟いた時、僕が買って来ますと、行ってくれた。名も知らず聞きもしなかったがそれが若き日の高野氏だった。

――歌集の著者から――

『木道』山田宗夫



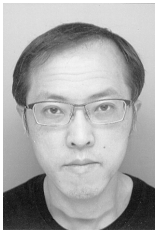
令和4年2月　柊書房刊

上梓後一年を経て、なんだか出版したという遠い事実のあるばかりのような気がしないでもない。一体出版の意味は何だったのか。

今でもつづくのは、信州にいて永く詠いつづけることができたという感慨だ。そうできたひとつは、歌作りの記録性という面だろう。感動の一刻を甦らせる日記代わりだった。もうひとつは虚構性という面で、想像に身を任せた言葉遊びの世界に惹かれたからだろう。殊に後者は、それと向き合い没入することが、私をさまざまなストレスから解放してくれた。それは、難題を抱える現実からの逃避ということばかりでなく、現実と再対面する励みになっていたようにも感ずる。結局、私にとって歌集作りはこの二点によるコスモス入会から三十五年間の自分の存在を改めて認識する作業であったようだ。

本集に対しコスモスのみなさま他より丁寧な評を頂戴した。心より感謝申し上げる。今まで歌集を戴きながら十分な返事もしなかった己を深く反省した次第である。

『茶色い瞳』今井　聡



令和４年２月　六花書林刊

歌集をまとめる過程で、相当量の推敲を施した結果、出版後も歌の推敲を繰返し行う習慣がついた。歌集の内容については、様々なご意見をいただき、なかでも「どこに面白味があるのか解らない」といった見識に注目した。詠んでいる内容よりも、作者は詠む過程において思考を施しており、その思考の流れに重きを置いているのだというご意見もあった。鋭いと感じ入ると共に、自作につきこれほど多くの「読み・見解」というものをいただいたことがこれまで無かったので、色々と考えさせられた。コロナ禍ではあったが、歌の友人達に小さな読書会を設けていただき、拙歌集を読んでいただけたことも、大きな励みとなった。第一歌集を出せたことで、少し大きな荷物を下ろせた感覚が強く、何度も、自分の歌集を、帯の文字色が変わるまで読み、われながらそこまで自作に思い入れがあったのかということにも驚かされた。改めて「これまで」と「これから」その区切りを付けることが出来たのだと今は思う。

――歌集の著者から――

『さくら変奏曲』江頭洋子

令和４年３月　柊書房刊

コスモスに入会して二十年経ち第一歌集を、その十年後喜寿を機に第二を、そのまた約十年後米寿記念に第三を出版した。

歌集を出すということは自分をふり返り次へのステップとすることに意義があると思う。その度に選者の先生から直接総合的なアドバイスを頂くことができる。特に作品について細々とご指導を賜わり有りがたく嬉しかった。今は亡き宮英子様（第一）と桑原正紀様（第二、第三）に改めて御礼申しあげます。

私は七十数年コーラスを楽しんでいて何れも音楽に関するタイトルをつけた。殊に今回の『さくら変奏曲』は八十八歳の自分を少しでも明るくとこだわった。

第三歌集で大変驚いたことがあった。十数名の見知らぬ方から、ネットで見たので読んでみたいと。拙い作品に目を止めて頂き感激した。ネット時代を痛感した。

歌集にお寄せくださった皆様からの感想や批評などを励みとして肩肘張らずに詠み続けたい。感謝!!